

# 10章 総合問題10

## 問題

【1】

A.

### 全訳

私は物書きが何か書きたいが書く題材がないと不平を漏らすのを何度も聞いたことがある。 私なら相手が誰であれ1時間も同席すれば、その人物について面白く読める小説を少なくとも1編は書くだけの材料が手に入れられるのだが、とまで言ってしまいたくなる。<sup>ⓐ</sup>頭の中に数多くの題材が用意されていて、その時の気分がどのようなものであれ、その中から1つ取り出して空想を遊ばせることができるのは愉快なことである。空想とは創作活動に要する想像力の土台である。<sup>ⓑ</sup>芸術家にとって空想とは、他の人々にとってのように現実から逃避するための手段ではなく、むしろ現実に近づくための手段となる、ということは芸術家の特権である。芸術家の空想には目的がある。<sup>ⓒ</sup>空想によって芸術家はある楽しみを得るが、その楽しみに比べれば、現実の感覚を働かせることによって得られる楽しみなどは色を失う。そして空想によって芸術家は自分が自由であることを確信する。

B.

### 全訳

人間はその行動においてもまたその判断においても、遠い過去にまで遡る因果の連鎖によって逃れ難く縛りつけられている。人間はある特定の地点——すなわち現在——でその連鎖を断ち切り、それによって限定されてはいるものの未来を変える力を持ってはいるが。常識的な言葉でわかりやすく言えば、人間は自分で決断し判断する能力を持ってはいるが、それにはある限界があるということである。それは過去が人間の決断そして人間の判断を無数の点で制限し、また決定してくるからである。我々の判断が完全に、また我々の力では覆し得ぬほどに過去によって支配されているということを認めてしまうことは、我々が道徳的にも知的にも無能力であることを認めてしまうことに等しい。しかし、我々の判断の中に過去によって支配されている部分が存在するということを認識しておくことは、時代の流行思潮にあまりに安易に染まってしまうことから我が身を守る最善の方法となり、進歩こそすべてだと信じた19世紀の人の思潮、堕落こそすべてだと信じた20世紀の人の思潮はその典型である。

【2】

### 解答

- (1) I was thirteen years old when I first visited New York City with my father.  
(2) ⓒ in Ⓝ on Ⓞ from Ⓟ of Ⓠ in  
(3) Ⓛ I and his brother Ⓝ My father and I Ⓟ the Augusts  
(4) thought Ⓟ (5) Ⓛ

- (6) 母親の感想。父親が伯父と自分の息子の能力をあっさり認めてしまって、少しも自分  
は闘志を燃やそうとしないから、その妻たる母親はつい腹が立つのである。
- (7) 伯父が出迎えに来てくれなくてがっかりしたこと。
- (8) A man who says he is your brother is at the desk.
- (9) 3人の男たちは、それぞれ特徴があって、間違いようがないこと。
- (10) 毛虫のような口ひげを生やした男と、父親のようなモシャモシャの眉毛をしている男。
- (11) ⑤ b ① c ⑥ s ⑦ b

**解説**

- (1) ① I … when ~ の型にすると the first time はそのままでは使えないから for the first time か、または同じ意味を示す first を使わなければならないし、visited と went は同じ内容を述べているのであるから visited ~ with my father とまとめなくてはならない。  
 「～した時、私は…だった」という日本文を英訳する際、我々は When ~, I … と書く傾向があるが、I … when ~ の方が英語らしい表現である。つまり、読む者に全体的な時間の枠を与え、その中で具体的な行為が行われたという思考方法を英語は取るのである。
- (2) ② in 《方向》  
 ③ on business 「商用で；仕事で」  
 ④ graduate の次には from ; in などが来るが、学校名や学年が来る場合は from である。  
 in は学科名 (graduate in law) に用いる。  
 ⑤ smell は完全自動詞にも不完全自動詞にも用いられるが、名詞をそのまま補語にとることではなく、「～のにおいがする」の意味なら、'smell of + 名詞' の型を取る。「～のようにおいがする」の意味なら、'smell like + 名詞' の型を取る。  
 ⑥ in 《着用》
- (3) ⑦ この小説は、“I”なる人物の視点で書かれており、一般に “I”（自分）は後に持ってくるのだが、ここは、My father claimed …と、父親の発言として書かれている。  
 したがって、父親とともに行動し、しかも父親の心の中で大きなウエイトを占めているのは自分の息子であるから I and his brother となる。  
 cf. “You and my brother are …”  
 ⑧ ここは、地の文で、“I”的視点で書かれたものであるから My father and I となる。  
 ⑨ 次の文に because we were all Augests とあることからも、母親が「オーガスト家の人々全体」を言ったことは明らかであるから the Augests を選ぶ。
- (4) ⑩ credit = honour ; approval  
 ‘比較級 + than ~ gave 人 credit for’ = ‘比較級 + than ~ thought’ として覚えておくと便利である。  
 cf. He's cleverer than I gave him credit for. = He's cleverer than I thought.  
 I gave you credit for being more sensible. = You are less sensible than I thought.
- (5) ⑪ every reason 「十分な理由」  
 ○ every = all possible ; the utmost

- a every book = all the books
- b Every boy in the class = All the boys in the class, The whole class
- c every minute … minute を強調するもの。
- d all possible ; complete の意。本文に用いられている every と同じ。
- e は、every [ten minutes] のように、「10 分間」を 1 つの単位と見なしているので、‘every + 単数名詞’ の例外ではない。
- (6) ⑯ 「his way of agreeing が父親の、他人をいらいらさせ腹を立たせるところだ。」と言っているわけで、この「他人」は誰かが問題である。この物語は “I” という人物の視点で書かれているから、当然「他人」 = “I” のだが、ここでは、子供の “I” が、もう 1 人の「他人」つまり母親の腹立ちを見ていると考えられる。特に、すぐ上に父親と母親のやりとりがあるから、この表現は母親の感想と解すべきである。そして、何に腹を立てたかと言えば、his way of agreeing であるが、この agreeing は、伯父と息子は「やりてだ」と認めてしまうことで、母親はその不甲斐なさに腹を立てたのである。
- (7) ⑮ この it は、If 飾の内容、my father was disappointed を指している。
- (8) ⑯ he was … の he が a man を受けているから “he” のままであり、his brother の his が your に変わることに気づけば簡単である。“he” を “I” としないように。  
*cf.* He said that a man who said he was his brother was at the desk.  
→ He said, “A man who says he is your brother is at the desk.”  
→ He said, “A man who says, ‘I am his brother.’ is at the desk.”
- (9) ⑯ ここは not quite interchangeable (まったくとりかえることができない) とはどういうことか答えればよい。つまり、3 人の男たちが、それぞれ異なる特徴を持っていて見間違いようもない、と答えればよい。
- (10) ⑯ one (1 人は) …, one (1 人は…), the third (3 人目は… ) と述べてきて、手に持っている飲み物に視点を移したため、他の 2 人 (the others)、つまり、すぐ上の one …, one … の 2 人の飲み物に言及したのである。
- (11) ⑯ この meet は make the acquaintance of ~ (近づきになる) の意。  
したがって、「私はヒル夫人にお目にかかったことはありますが、直のおつきあいはしたことがありません」の意の b を選ぶことになる。a は「出会う」の意の meet だから不可。c は「出迎える」の意の meet であるし、d は「(要求に) 応える」の意の meet であり、e は「触れる」の意である。  
① この meet は「出迎える」の意。c を選ぶ。  
⑤ この meet は b の meet と同じ。この meet はすでに説明した make the acquaintance of ~ がさらに発展して be introduced to の意にもなるもの。

## 全訳

僕が初めてニューヨークに行ったのは、13 の時で父と一緒にいた。伯父のクイーンに会うためとフェルメールの本を買うためだった。フェルメールの本というの私の考えであり、また母の考えでもあった。伯父のクイーンに会うというのは父の考えだった。30 年ほど前、伯父はシカゴ方面に消え、今、どうも金持ちになつたらしい。1 週間前彼は仕事で

東部に来ていたし、僕は優等で8年生を卒業していた。そこで父が言うには、お前と兄貴の奴は誰よりも頭が切れる。——つまり「やりて」と僕たちを呼んだ、がその言い方にはその当時僕が思ったよりもずっと皮肉がこもっていたように思う。——それから、いかにも父らしく、何を思ったのか、突然、今こそ2人が会う時だと痛切に感じたのだ。ニューヨークは当時7ドルかかるところだった。僕達は当時、すべてを、距離も時間も金で計った。第2次大戦は終わっていたが、まだ大恐慌下にあった。父は往復切符と5ドルの紙幣をポケットに入れて僕と出発した。その5ドルは本代だった。

母は駅のホームで突然叫んだ。「オーガストの人達って大嫌いよ。」これには僕はびっくりしてしまった。なぜなら僕達はみんなオーガストの者なのだからだ。僕もオーガスト、父もオーガスト、伯父のクウェインシーもオーガスト、母も、当時僕はそう思っていたのだが、オーガストなのだから。

父は母の頭の向こうを見つめてこう言った。「さもありなん、お前が銃をとってわしらを撃ったとしても、わしは責めない。クウェインとお前の息子は別だぞ。一族の中でやる気十分の人間といやあ、この2人だけなんだからな。」父のこのあきらめようほど、カッときせるものはなかった。

伯父のクウェインはペンシルバニア駅に僕達を出迎えてくれなかった。父ががっかりしたとしても、それを僕には見せなかった。1時をまわっていて、僕達が昼に食べたものと言えば2本のキャンディーバーだけだった。実に長いと僕には思えた道のりを、故郷の道よりもほんの少し広いだけで、それほどきれいでもない舗道を歩いて、ホテルに着いたのだが、それはグランド・セントラル駅の下のキャラメル色の地下道からなんだかによっきり芽を吹いたような建物だった。ロビーはいい匂いがした。帳場の人がクウェインシー・オーガストに弟さんとおっしゃる方がこちらにお見えですと電話をしたあと、エレベーターは僕達を20階まで運んだ。部屋の中には3人の男が座っていて、誰もが灰色か青の背広を着ていて、ズボンにはアイロンがぴしっとかかり、靴下止めが足を組んだ時に折り返しの下から見えた。男達はまったく三者三様だった。1人は毛虫のような口ひげを生やし、1人は父のようなモシャモシャなブロンド色の眉毛をし、3人目は片手に飲み物を持っていた——あの2人も、持ってはいたが、それほど強くは握りしめていなかった。

「皆さん、これは弟のマーティーとその坊主です。」と伯父のクウェインは言った。

### 【3】

A.

#### 解答

- (a) (1) Do you really mean what you say?  
(2) He had a kind word for anyone whom he met.  
(3) Monday afternoons are when I am busiest.
- (b) (1) This is how it happened.  
(2) That's not what you said before.  
(3) The day will soon come when the average life span of the Japanese will reach ninety.
- (c) (1) Mt. Fuji, which we climbed yesterday, is the highest mountain in Japan.

(2) That is the way it is [things are].

解説

- (a) (1) 「私は本気で言っている」を表す決まり文句が, I mean it, I mean what I say に当たることを知っていれば, mean と what を補って, Do you really mean what you say? とできるはず。この mean には、「～を意図する」「～（言葉など）を（…の）つもりで言う」といった訳語が与えられるが、これだけではなかなかイメージがつかみにくいので、基本的な短文を覚えておくのがよいだろう。
- (2) 「～に対して優しい言葉をかける」は, have a kind word for ~ という言い方に当たる。「彼は誰と会っても」を「彼が会ったどんな人に（対して）も」と考えて, for の後に anyone whom he met を続ける。もし「1語不足」という条件であれば, anyone whom の代わりに, 複合関係代名詞 whomever を補えばよい。
- (3) are と am 2つの動詞が与えられているのに着目すると, Monday (①) are (②) I am busiest という構造が予想される。日本文の意味は、「月曜日の午後がいつも自分にとって一番忙しい」ということなので, 主語は複数にするのが妥当で, 次に続く動詞も are となっているので, ①には afternoons が入る。「～が一番忙しい日です」から考えて, ②には the days when を入れればよいのだが, これを1語に縮めるには, 先行詞を省略して, when を入れることになる。なお, busiest が the busiest となっていないのは, 「叙述用法の形容詞の最上級では, 同一の人／物についての比較の場合, 通例 the は付けない」という原則による。

cf. The lake is deepest at this point. (湖はこの地点が最も深い。)

- (b) (1) これは, This is how it happened. という決まり文句をズバリ聞いている問題。「これが, それ (=その状況) が起こった方法です」が文字通りの意味。how の代わりに This is the way it happened. としてもよいが, (×) This is the way how it happened. は不可。現代英語では the way how は用いられないと思ってよい。
- (2) これも決まり文句に近い表現を問う問題。「それは, さっきあなたが言ったことではない」が文字通りの意味。「さっき」に対して before を用いることに疑問を持つ人もいるかもしれないが, before の英語の定義は at an earlier time なので, 日本語の「さっき」の意を十分含有できる。あるいは, 「少し前」の意で some time [a little while] ago, 「数分前」の意で a few minutes agoなどを用いてもよい。
- (3) 「…する日がやってくるだろう」は, the day will come when …で表す。the day when … will come は語用的に不可。「間もなく」を表す soon は, 動詞 come の直前, あるいは直後に置く。「～の平均寿命」は the average life span of ~, the average life expectancy of ~でよい。「日本人」は the Japanese でも Japanese people でもよいが, the Japanese は基本的には学問的に客観的なことを述べる場合か, 日本人以外の人が日本人について用いる表現。「90歳になる」は「90歳に達する」と考えて, reach ninety とするのが最も自然。become ninety は不自然なので避けるべき。

- (c) (1) 「先行詞と同じものが他にもあれば、制限しなければならぬので制限用法」、「他に同じものがなければ、制限しなくてよいので非制限用法」というのが関係詞の基本。ここでは、「日本に富士山と呼ばれる山が他にもある」といった前提は一切書かれていないので、誰もが知っている富士山そのものを指していると考えて、非制限用法を用いなければならない。なお、ここでは関係詞によって導かれた節が文中に挿入されている形になっているので、which we climbed yesterday の前後にコンマが必要。
- (2) 「解答」の英文以外に、That is the reality. のように表してもよいが、「解答」の英文の方が応用がきく。例えば、「昔は世の中そんなものでした」は、That is what things used to be like. としてもよいが、That is the way things were. とすれば、より colloquial な英語が簡単にできる。

B.

**解答**

- (1) A : Watch [Mind] your language. I hate the way you talk [speak] to me.  
B : That's not the way you were (before) . [You're different from what you used to be.] I don't want to be with you any more.
- (2) A : My wife is Japanese, so our children speak Japanese.  
B : That's what I would have guessed.  
A : Oh, why?  
B : Because their Japanese sounds a little feminine. I knew they'd learned it from a woman.

**解説**

- (1) 日常的によく聞かれる対話文である。「言葉遣いに気をつけろ」の「言葉遣い」は、language が一般的。また、比喩的に tongue や mouth もよく用いる。この場合の「気をつけろ」には、watch を命令文で用いるとピッタリする。また、イギリスでは watch の代わりに mind も用いられる。「俺はお前の俺に対する口の利き方が嫌いなんだ」は、つまり、「俺はお前の話し方が嫌い」ということだから、I hate the way you talk [speak] to me とする。  
「昔のあなたは違っていたわ」は、you're different from what you used to be としてもよいが、A - (c) (2) で用いた that is the way it is を応用して、that's not the way you were (before) としてもよい。  
「もう別れたいわ」は、「恋人同士」なら、I don't want to see you [be with you] any more, I want to break up with you など。「夫婦」の場合は、I want to leave you, I'm leaving you (私はあなたと別れます) などを用いる (I want to be separated from you とすると「別居したい」の意)。
- (2) 「妻は日本人なので」は、話者の間の了解事項であれば since …, 新情報であれば because …を用いるが、この後の展開から、まだ相手にそのことについて話していないかったことがわかるので、Because my wife is Japanese, …とする。また、My wife is Japanese, so …とするのも自然。  
「子供たちは日本語を話します」の「子供たち」は、離婚していない限り、父親なら

*our* children を用いる。話し手が母親であれば、*our* 以外に *my* を用いることもある。「そうだと思っていました」は、相手の言葉に相づちを打つ時の決まり文句である、That's what I would have guessed. を用いるのが自然。

「日本語が女っぽいからです」は、Why? に対する返答なので、Because …で答えるのが基本。「彼らの日本語が女っぽく聞こえるからだ」と考えて、Because their Japanese sounds a little feminine. とする。完全に女性的というのではないだろうから、feminine の前に a little を付ける方がよい。

「それで女人の人から習ったってわかったんです」の「わかった」は、「動作」というよりも、「知っていた」という「状態」を表すと解釈して、I knew …とする。「それで」は無視して、I knew they'd learned it from a woman. とするのが自然。

## 【4】

### 解答

- (1) 1      (2) j      (3) k      (4) d

### 解説

- (1) 「彼は何日も人に会っていなかった。」  
○ without company 「人と一緒にいない」
- (2) 「眼鏡がなければ先生の板書を判読できない。」  
○ make out ~ 「～が（目や耳で）わかる」  
ここでは「～を判読する」の意。この out は副詞。
- (3) 「風邪が治るのに長くかかった。」  
○ get rid of ~ 「～を取り除く」  
○ get over ~ 「～を乗り越える」
- (4) 「この本の著者は誰か。」

Who is the book by? は「この本は誰が書いたか」に当たる最も自然な英語。

## 【5】

### 解答

- (1) f      (2) h      (3) j      (4) i  
(5) b      (6) k      (7) g      (8) i

### 解説

- (1) 「期間」を表す for。  
(2) 「性質」を表す of。  
(3) 「結合・随伴」を表す to。  
○ be married to [× with] ~ 「～と結婚している」  
※受身形で to を用いる。能動態では marry は他動詞なので前置詞不要。  
(4) 「出現・発生」を表す out。この out は副詞。  
○ find A out 「Aを発見する」  
(5) 「反対・対立」を表す against。 ⇔ for

- (6) until 「…するまで」。この場合は接続詞。
- (7) 「分離」を表す from。
  - graduate from ~ 「～から卒業する」
- (8) 「離脱」を表す out of。
  - talk A out of B 「AにBを思いとどまらせる」

**全訳**

クレア：こんにちは、チャド！ 久しぶりね。

チャド：やあ、クレア！ 君がこの種の芸術に興味があるなんて知らなかつたよ。

クレア：私、興味があるのよ。それどころか、熱中しているのよ。

チャド：本当かい？ ところで、君の妹のローラはスティーブと結婚するんだってね。本当なの？

クレア：そうなの。だけどどうやってそのことがわかったの？

チャド：ピーターがそう教えてくれたんだ。君のお父さんは最初はすごく反対したっていうことも彼は言っていたよ。お父さんはローラが大学を卒業するまで待ってほしかったそうだね。

クレア：その通りよ。だけど、ローラは父を脅して思いとどまらせたの。父が「いいよ」と言わないなら、スティーブと駆け落ちするってローラが言ったのよ。



E3T/E3TK/E3TF

難関国公立大・医学部英語／難関大英語 T

京大英語／難関大英語 T (京大)

一橋大英語／難関大英語 T (一橋大)



会員番号

氏名